

オロンと鳴く 絶滅危惧種ウミガラス

加藤良一

2015年11月、北海道北西部の日本海に面した羽幌町^{はぼろちよう}へ行った。

その日は記録的な大雪となり、羽田発の飛行機は、千歳空港の天候次第で引き返すかもしれないとの条件付きで離陸した。他に手段もないから、羽田へ戻ってきたらそれも仕方ないと諦めていたが、予定より遅れはしたもののとにかく千歳へ無事辿り着いた。



しかし、そこからが大変で、乗り継ぐ予定だった高速道路に行くバスには間に合わず、やむなく普通バスに乗り込んだ。札幌から羽幌まで180km以上ある。日本海沿岸の夜道をバスはあちこち停まりながら、ひたすら北上して行った。雪道を走っているとは思えないようなスピードで疾走していたが、おそらく北の国ではふつうのことなのだろう。

札幌から4時間半、夜半になってようやく羽幌のバスターミナルに到着した。そこからホテルまでさほどの距離もないが、折からの吹雪が横殴りに吹きつけていた。東京から出向いたこちらは大した冬支度もしていなかった。開いた折り畳み傘を必死で抱えながらホテルまでの雪道を15分ほど歩いた。夜も更けていたし、疲れもあったので、夕食後はすぐに眠りについた。

翌朝、前夜とは打って変わって快晴となり、風も止んでいた。ホテルから臨む日本海は静まり返っていた。ただ、道路には昨夜来の雪が降り積もり、ふつうの皮靴で歩くのは容易ではなかった。積もった雪をよけながらホテル裏手にある、北海道海鳥センターへ行った。一度覗いてみたいと思っていた場所だ。

平日の昼間、見学者など一人もいなかった。海鳥センターの紹介ビデオを観たあと、北海道の海鳥が直面している問題について若いスタッフの方から説明を受けた。このセンターは、環境省と羽幌町の共同運営による海鳥専門施設で、このような施設は日本に他にはないとのこと。主な活動は絶滅が心配されるウミガラスの保護や天売島^{てうりとう}で繁殖する海鳥の調査・研究であるという。

羽幌町の沖合30kmにある天売島^{てうりとう}は、周囲12キロほどの小さな島である。切り立った断崖が続く西海岸は、世界有数の海鳥の繁殖地でウミガラスとウミスズメの国内唯一の繁殖地であり、またケイマフリやウトウの国内で最も大きな繁殖地ともなっている。天売島という名は、アイヌ語の「テウレ」（魚の背腸）もしくは「チュウレ」（足）に由来するようだ。「海鳥の楽園」と呼ばれている。



ウミガラスはその鳴き声からオロロン鳥とも呼ばれている。ウミスズメとともに絶滅危惧 I A類「ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い」ものに指定され、保護対象となっている。動植物の絶滅に関する基準は、「レッドデータ」にカテゴライズされている。

I A類は保護をしなければ絶滅の危険が差し迫った状態だが、保護活動にはさまざまな困難がある。もちろん自然環境の変化も大きく影響するが、漁網に引っかかることで命を落とすなど人間との関わりも無視できない。また、ハシブトガラスやオオセグロカモメなどに捕食されるケースも数多くある。そして、意外なのが野良ネコ対策である。

レッドデータブックの 카테고리

絶滅	我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅	飼育・栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧 I 類	絶滅の危機に瀕している種
絶滅危惧 I A 類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧 I B 類	I A 類ほどではないが、近い将来野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧 II 類	絶滅の危険が増大している種

天売島の東側には民家があり400人ほどの人が住んでいる。そこには飼いネコ以外に野良ネコが300匹ほどいてこれがウミガラスなどを攻撃するらしい。海鳥の楽園として「人と海鳥とネコが共生する天売島」を目指すこのセンターでは、野良ネコを捕獲して馴化じゅんかつまり環境の変化に適應させ、人に慣れさせてから、里親に渡す活動も合わせて実施している。

捕獲した野良ネコの飼育場所へも案内してもらった。捕獲したばかりのネコをすぐにケージから出すわけにはいかないが、人に慣れてくるにしたがってケージの外も自由に歩かせるようにしている。じつに気の長いはなしだが、こうやって一つひとつ解決してゆく以外に効果的な方法はないようだ。

ところで、合唱に親しんでいる方ならご存知だろうが、北海道の海鳥といったら真っ先に作曲家・廣瀬量平の組曲『うみどり うた海鳥の詩』を思い起こすのではないか。この曲は、更科源蔵の詩に廣瀬量平が作曲したもので、昭和52年度(1977)文化庁芸術祭優秀賞を受賞した作品である。混声・女声・男声版ともに揃っており、いまだに人気の衰えない名作。その第一曲目に「オロロン鳥」が出てくる。

オロロン鳥
 オロロン オロロンとなけば
 岩も もの言わぬ岩も
 オロロンと答える
きりぎし
 切岸の 岩棚の 歯の上に
いのち
 生命あため 海を見る
 ウミガラス ウミガラス
 ふるさとは 岩の上
 雨ふれば 雨にぬれ
 陽が照れば 陽にやかれ
 風ふけば 骨かれる
 水平の 落日に 胸は燃え
 海 昏れば 胸しづみ
 光をもとめ 南をしたい
 たどりつく ウミガラス
 オロロンとなけば 海も
 海も岩もオロロンと答える

北の海に棲む海鳥たちが厳しい環境に生きる姿を描いた詩である。二番「エトピリカ」、三番「海鷗」、四番「北の海鳥」の四曲で構成されており、オロロン鳥のほかエトピリカやケイマフリなどさまざまな海鳥が登場する。

2022年1月18日

[Back](#)

[「雑感」Topへ](#)

[Home](#)

[「Home Page」へ](#)